

「台風0806号」

—船舶遭難との因果関係についての考察—

土井 修 二*

はじめに

筆者は2008年 フィリピンで発生した海難事故に興味を持ち、台風予想や、天気図、雲画像の利用が適切であれば、この海難は防げる余地があったのではないかと考え、ここに見解を発表し、専門家の意見を伺うことを所望いたす次第であります。

(1) 海難の概要

2008年六月二十一日 発達した強い台風0806がフィリピン中部を運び、その折 マニラよりセブ島に向けて航行中であつた内航客船(約23000総トン)が荒天により沈没、1000名を超える犠牲者が出た。

(2) 気象状況 6月20日—出航時

台風はサマル島東岸にあり 960hpa 発達中

上層高気圧はルソン島の北に 500hpa 5880の中心があり、その上層はチベット高気圧に覆われる

これに対応する、広大な晴天域があり、台風の雲域は東西方向に伸びる

台風予想は、ルソン島東岸を北上、その後転向の予想で、若干衰弱する予想

6月21日—遭難時

台風は北上せず、西進 945hpaとさらに発達
上層の高気圧 500hpaの高気圧中心は、衰弱しつつも台湾付近にあり、チベット高気圧も後退気味ではあるが以前として強い

台風の雲域は、東西方向に伸びて、昨日より大型化、中緯度高気帯に相当する晴天域は

昨日同様、顕著。

(3) 船舶運行についての問題 予測可能性

1. 台風予想は、出航前後には、北西進し、ルソン島に上陸し衰弱傾向で転向。ということで、台風

をうまくやり過ごすことが可能と判断し、出航を決定したものと思われる。

2. 台風が予測どおり進行した場合、再接近は21日未明から朝、航行海域は西風になり、ミンドロ島の山脈により、風が弱まる効果が利用できる
その後台風は離れていき、衰弱傾向もあいまって以後の航海は順調。というように判断
3. 実情は、台風が予想と異なり、西進し、しかも発達したため、当該船舶は、台風北側の強風をまともに受ける形になり、航行不能になり、遭難

台風予想の問題 中緯度の気圧の谷に乗り、転向するものと予想されていたが、天気図、衛星画像をよく観察すると、上層高気圧が強いこと、気圧の谷と台風が離れすぎていること、台風の雲域が東西に伸びていることなど、西進を示唆する要素もあつたのではないか

出航してからの、台風情報収集など、不備があつたのではないか。一台風の情報は逐次船舶無線等で入手できるはずだし、予測と違う動きを早期に察知して、引き返す、避泊する、最寄りの島に緊急避難。するなどすれば、あれだけの犠牲者はでなかつたのではないか

まとめ

今回の船舶遭難は、台風予報のはずれによって起こつたように思われるが、そもそも「予報」は不確実な面を伴うもの。出航後も実況資料を注意深く収集検討していれば、状況の変化に適切に対応でき多くの犠牲者を出す事態を防げる可能性があつた。

日本気象予報士会 関西支部

土井 修二